

メッセージアウトライン

創世記 1:6 ~13 「創造の第二日と第三日」

[6-8]「神は仰せられた。『大空が水の真ただ中であれ。水と水との間に区別があれ。』神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。そのようになった。神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日」

創造の第一日、地球の外観は巨大な水のボールのような状態で、他の物質は水に溶解しているかコロイド状になっていたと思われる。そして第二日において神は「大空が水の真ただ中であれ。水と水との間に区別があれ」と仰せられた。神のことばで地球を構成している水が上の水と下の水に分けられ、その間には「大空」があった。「大空」はヘブル語の「ラキア」ということばで「広がり」または「薄く引き伸ばしたもの」を意味する。8節で神はこの大空を「天」と名づけられている。天は星のある天(イザヤ 13:10)、神の御座の天(ヘブル 9:24)も意味するが、ここでの意味は明らかに大気圏のことである。

水の上下の分離は、おそらく神が水の一部に熱エネルギーを加えるという過程を通して行われたことであろう。そして熱エネルギーはさまざまな物質が溶解している水から大気的气体成分を分離するように働き、これが上にある水を支える大空となったと考えられる。上にある水は厚い雲の層や不透明な霧の層ではなく水蒸気の層であったと考えられる。なぜなら水蒸気はいくら大量でも透明であるので、天体が「しるしのため、季節のため、日のため、年のため」(創 1:14~15)に地上を照らすことができるからである。

この上にある水(水蒸気の層)は次のような働きをしたと考えられる。

- ①地球全体を温室化し、地上のどこでも一定の快適な暖かい温度を維持できた。
- ②地上の温度はほぼ一定であったので、大きな空気団の動きは妨げられ、それゆえ大気の循環もなく、現在のような水の循環もなく、直接水面から蒸発したものを除いて、雨も降らなかったことであろう。
- ③地上いたる所に暖かい温度と快適な湿度が保たれていたもので、不毛の砂漠も万年氷河もなく、世界中に青々とした植物が繁茂することができた。
- ④外宇宙から来る有害な紫外線や宇宙線や破壊的エネルギー等から守り、人と動物の健康と長寿のために大いに役立った。

これが神による創造の第二日であった。

[9-10]「神は仰せられた。『天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。』そのようになった。神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた」

神のことばによってかわいた陸地が下の水から分離された。そこでは大きな化学変化が起こったと考えられる。下の水の中に溶解していた諸元素は沈殿し、他の元素と結合して巨大な鉱物の化合物や岩石を形成し、固形地球すなわち地殻やマントルや中心核を造りあげていったことであろう。形成された物質は一般に比重の重いものは下に、軽いものは上に、または溶解したままで配列されて行ったであろう。これは地殻が均衡を保つためである。そして最後に水の上

にかわいた所が姿を現した。神はこれを「地」と名づけ、水の集まった所を「海」と名づけられた。

この「地(エレッツ)」は 1:1 節と 2 節の「地」と同じことばである。このことは、初めに創造された形のない物質と、最終的に固い地を構成するのに用いられた物質とは同じものであることを示している。これらは創造の第三日の第一段階として完成された。

[11-13]「神は仰せられた。『地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類に従って、地の上に芽生えさせよ。』そのようになった。地は植物、すなわち種を生じる草を、種類に従って生じさせた。神はそれを見て良しとされた。夕があり、朝があった。第三日」

ここでは植物が大きく分けて「種を生じる草」「その中に種がある実を結ぶ果樹」と表現されている。神は地球の諸元素を複雑な系に組織し、それらが植物として、種を持ち、種類に従って再生産（繁殖）する力を持ったものとして造られた。そのための複雑なプログラムを持つ遺伝子の本体は今日では DNA として知られている。これらの植物は、その中に種を持つ完全に成長した植物として造られたのであって、単なる種として造られたのではない。それゆえこれらの植物は、それ自体、ある程度年数を経ているように見えたであろう。これは真の創造に必要で、それに当然伴う出来事だった。創造の週に作用した過程は、「創造と制作」の過程であり、現在起こっている過程とは違うのである。後述するが最初の人間アダムも完全に成長した人として創造された。

「種類に従って」という句は創世記 1 章に 10 回も使われている。「種(ミン)」という用語が意味することは、変異には限界があり、各々の生物は独自の DNA 構造を持ち、各々自分の種類に従って繁殖するので、他の種類の子を生じる（垂直的変異）ということはあるえないということである。例→犬はサルにならない。しかし、同じ種内での変異（水平的変異）は起こる。例→犬の種類 それゆえ、すべての生物が共通の祖先、または血統に関係づけられるという進化論の教えは誤りであることがわかる。

また創造された種の不変性は I コリント 15:38~39 からわかる。

「神はそれを見て良しとされた」…神のなさることは完全で間違いがない。

「夕があり、朝があった。第三日」…これも第一日、第二日と同じく、文字どおりの 1 日(24 時間)が経過したことの表現である。

神が大空によって上の水と下の水を分けられ(二日目)、また陸地と海とすべての植物を造られた(三日目)とのことばは、信仰者以外には愚かで受け入れることができないと思われるかもしれないが、それは神が全知全能のお方であることを知らないからである。神はその御力で天地万物を創造することのできるお方である。

聖書には世の初めから、世の終わりに至るまでの神のみこころ、人間の罪と墮落、そして私たち人間に対する神の救いのご計画が書かれている。私たちはこの聖書のみことばに養われ、教えられ、導かれつつ歩いていくことが大切である。

「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」 II テモテ 3:15